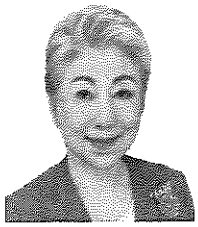
大相撲と私

佐々木　知　子



私は自他共に認める大相撲ファンである。その歴史、二十一年。

参議院議員最後の平成十五年、厚労大臣政務官に就任したところ、副大臣が川重勤務歴をお持ちだった。私の父がずっと川重勤務だったので、「今日社長と初めて会うので一緒に来てよ」とのこと。社長も私もクラシック好きで気が合い、社長の同郷、宮崎出身のT氏を引き合わされた。その方が大タニマチで、誘われて、国技館で初めて大相撲を観戦したが、なんと砂被り正面最前列である！

正直言って当初は退屈だった（砂被り席は飲食不可）。勝敗こそ大体分かるが、四つ相撲と突き押し相撲の違いも知らない。喧嘩四つ・相四つなど相撲用語が全く分からず、まさにちんぷんかんぷん。これがオペラだったらなあと思ったりもしたが、だんだんと取り口や決まり手や個々の力士の経歴・特徴が分かるようになって、面白くなっていった。新潟の知人に好きな力士を聞かれて「寺尾」と答えると、まさかのような話、彼はたまたま寺尾関の大タニマチで、相撲部屋につれて行ってくれ、テレビ以上のいい男ぶりに舞い上がったものである。

類は友をよぶというのか、大相撲好きであることが知れると、いろいろな方が声を掛けてくれる。年三回ある国技館大相撲は毎場所二回程行くし、名古屋場所や九州場所にまで足を運んだこともある。現役時代大ファンだった稀勢の里が親方になって興した二所ノ関部屋（在茨城）にも、昨年秋、自民党の女性団体で訪れた。

大相撲の醍醐味は、体重体格を問わず、同じ土俵で戦い、短時間で必ず勝負が決することである。小よく大を制したときの快感はたまらないし、駆け引きや対策が効を奏したり失敗したり…。同じ格闘技でも体重差別が設けられている柔道やレスリングとは全く違い、そもそも大相撲は神事である。横綱土俵入りや行事の采配があり、全体のファッション性も高いのでわくわくする。

日本人の横綱誕生をずっと願っている。運動神経も体格も良い若者は、脚光を浴びる国際的スポーツを選びがちで、なり手が少ない問題が大きい。現役が短いと言う人も多いが、四十歳の玉鷲関が連続出場記録を更新しながら、元気に土俵に立ち続けている事実もある。日本が世界に誇れる文化である大相撲が今後もしっかりと続いていくことを、一ファンとして心から応援したいと思っている。